

Frontline Report

営業現場の声から始まった「商談作成AI エージェント」企画から展示までの物語

「この名刺、システムに登録しておいて」「前回打合せの要点だけまとめて」— 忙しい営業現場で繰り返される“ちょっとしたお願い”を、なるべく簡単に片づけられないか。物語は、そんな素朴な声から始まった。名刺管理サービスやCRMは高機能だが、誰もが同じように使いこなすのは難しく、運用負荷やコストも無視できない。そこで、「必要十分な機能を、軽く速く」を合言葉に、AIエージェント型の業務支援アプリ「商談作成AIエージェント」の構想が立ち上がった。

まず着手したのは、ニーズの棚卸だ。既存ツールに追随し、“全部入り”を目指すのではなく、現場の時間を効果的に取り戻す機能に絞った。名刺OCR、リアルタイム文字起こし、議事録生成、アジェンダ作成等—商談前後で発生する庶務を、自然言語の指示だけで処理する“最短動線”を目指した。

続いて、約3カ月の開発。生成AIを用いた仕様ドラフトの自動化、プロンプトとワークフローの反復改善、モバイル前提でのOCR精度向上など、限られた期間で短距離走を刻むように課題を潰していく。音声→要約→アクション提案の業務動線を切らず、エージェントが次の一手を先回りで示す体験を重視しながら機能拡張を進めた。

そしていよいよ、「CTC Discover 2025」での展示を迎えた。デモでは、名刺撮影で即時OCRが走り、重複チェック



やCRMドラフトまで自動生成。会話記録からは要点サマリや次回アジェンダ案が提示。来場者からは「短期間でここまでできるのか」「モバイルOCRの実用度が高い」といったポジティブな反応が寄せられた。

これらのフィードバックから、エンハンスの道筋が見え始めた。まず、社内ツール群(スケジュールや資料保管、承認フロー)との橋渡し。そして、権限制御・監査ログ・データ取扱を含む運用ガバナンス強化。加えて、用途ごとのモデル選択とコストの最適化である。この取組を起点に、各部の困りごとを束ねる“AIエージェント・ポータル”へ繋げていきたい。使われ続けるシステムは、現場から生まれるのだ。

西日本向けイベントで、CTC DISCOVER厳選AIセッションを配信

12月4日、西日本エリアのお客様向けに、「CTC DISCOVER 2025」の厳選コンテンツをお届けするオンラインイベントが開催された。金融Gからは、現場起点のAIエージェント活用とオンプレLLM検証の知見が共有された。その他、生成AIセキュリティの最新動向やCTCの新たなオンプレAI基盤サービス「CUVIC GPU Zero」が紹介された。

金融AIコミュニティハッカソン、「Google Japan@渋谷ストリーム」で開催

12月19日、Google Cloudの生成AI「Gemini」を活用して、未来のサービスを企画・創出する「金融AIコミュニティハッカソン」が、Google Japan渋谷オフィスにて開催される。金融Gから営業・エンジニアの枠を越えて集まった有志3チームが、それぞれ磨き上げた力作を発表する。生成AIの新たな可能性を競い合う予定だ。

AIエージェント時代のID管理:”誰が何を指示したのかを残す”ということ

生成AIを組み込んだ「AIエージェント」を業務に活用する動きが、金融機関でも本格化しつつある。メールの下書きや議事録生成だけでなく、勘定系以外のシステム連携やワークフロー操作を“半自動”で行わせたいというニーズも見られる。一方で、AIエージェントが人間の操作・意思決定を代替するほど、「その処理は誰の意思として行われたのか」「どこまでを人が確認したのか」といった責任の線引きが曖昧になりやすい。「AIエージェントのID管理」は、こうした不安を軽減するための前提条件となる。

現状、多くの現場ではAPIキーや共有アカウントを用いてAIエージェントを動かしているため、ログ上は「システムユーザ」による処理としてしか記録が残らないケースがある。承認フローや顧客接点の自動化が進むほど、「この回答はどの社員の指示で作られたのか」「どのAIエージェントが、

どの権限で外部システムを操作したのか」を後から追跡できないことは大きなリスクだ。また、複数のAIエージェントが連携する構成では、どのエージェントがどの役割を担い、どこまでを“代理”として振る舞ってよいのかを明確にしておかなければ、なりすましや権限逸脱の温床にもなりかねない。とりわけ、誤配信や誤登録が致命傷となりうる金融業務では、「あとから確かめられること(トレーサビリティ)」が重要な統制手段となる。そのためにも、AIエージェントのID設計は早期に議論しておく必要がある。

CTCでは、AIエージェントを「人」と「システム」の中間にある新たな主体として、人間とは別にIDを付与し、権限・ログ・責任範囲を切り分けて管理する必要性に着目している。具体的には、「誰の代理として動いているか」「どの業務で、どのシステムに、どのレベルまで触れてよいか」をポリシーとして定義し、それをトレース可能な形で記録する仕組みが求められる。AIエージェント活用を進めるうえで、モデル精度やプロンプトの工夫だけでなく、ID管理・監査ログ・権限制御を含めたガバナンス設計を行うことが、金融機関における“責任あるAI運用”の土台になるだろう。

Crossroad Special

AI x スタートアップ x 修羅場



株式会社Low Code
COO 青木 晃一 氏

私は現在、生成AIの定着化支援を行うスタートアップでCOOを務めています。三大メガバンク

や五大商社のCopilot／Copilot Studio導入を、現場に根付くかたちで支援してきました。朝起きてから寝るまで、1日の半分以上の時間をAIと対話しながら過ごしています。

私にとってAIは、「一緒に経営を考える相棒」です。経営未経験のまま中期経営計画の策定をいきなり任された時、右も左も分からない修羅場でChatGPT(当時「o1」)と徹底

的に議論し、思考整理や論点出しを繰り返しました。この「修羅場 with AI」経験を通じて、AIと一緒に高難度の仕事にも挑めると実感したことが、のめりこみの原点です。

多くの企業を支援する中で、AIを使いこなす人に共通しているのは「のび太力」だと感じます。困ったらすぐ「ドラえもん！」「泣きつく彼のように、困りごとをまずはそのままAIに投げてみる人ほど、AIの得手不得手を早くつかみ、思いもよらない解決策に出会っていきます。プライドを捨てて頼り切る姿勢こそが、AIネイティブへの近道かもしれません。私自身は、日々の思考や判断をテキストや音声で記録し、「もう一人の自分」を育てる試みもしています。

AI活用に足踏みしてしまっている方は、ぜひ今日から「のび太くん」になってみてください！そこから、ビジネスやご自身の新しい可能性がきっと拓けるはずです！



無限の未来と、幾千のテクノロジーをつなぐ。

CTC Financial Services Group



CTC金融事業グループの最新情報は
オウンドメディアサイトへ！

<https://financial.ctc-g.co.jp/>



お問い合わせ



伊藤忠テクノソリューションズ
金融事業グループ金融NEXT企画部

✉ fsgnext-biz-dev@ctc-g.co.jp